

< 症例・事例研究 (査読あり) >

新型コロナ禍における野外スポーツ実習(野外活動)の成果と課題 — 2020年度および2021年度の継続的な取り組みから —

The Outdoor Education Program “Outdoor Activities” Under COVID-19:
Outcomes and Issues — From Continuous Efforts in 2020 and 2021 —

中丸 信吾¹⁾, 森田 陽子²⁾, 奥玉 南³⁾, 大西 歩美³⁾, 清田 綾子³⁾

Shingo NAKAMARU, Yoko MORITA, Minami OKUTAMA, Ayumi ONISHI, Ayako KIYOTA

Abstract

Even against the backdrop of the COVID-19 pandemic, face-to-face physical education classes have started being conducted at our university in phases since June 2020. In 2020 and 2021, the outdoor education program, which involves conducting outdoor activities, was implemented as a day program on the campus as well as in its neighborhood.

The purpose of this report was to examine the outcomes of and issues involved in organizing outdoor activities in 2020 and 2021 under the spread of COVID-19. To this end, our research participants, who were 30 students having participated in the outdoor activities conducted in 2021, completed an evaluation questionnaire at the end of each physical education class. The questionnaire comprised questions pertaining to the educational effects, participant satisfaction levels on attending the classes, and the measures they perceived as essential to prevent the spread of coronavirus. We then analyzed the 2021 evaluation questionnaire and compared the results with those obtained from the questionnaire distributed in 2020.

Educational effects, and management method to control the spread of the virus, resulted from the outdoor education program. Despite the program organizers having implemented COVID-19 infection control measures adequately, some students still not became implement infection control measures; thus, it was deemed imperative to educate them about the safety measures to be followed during the pandemic.

Outdoor education programs may not be held onsite due to COVID-19. Therefore, it is crucial that the day program conducted in and around the campus entail educational value as an onsite alternative. This continuous effort over a span of two years has helped organize a day program of high educational value.

Keywords: COVID-19, outdoor activities, educational effects, program management construction

I. はじめに

我が国において2020年から拡大した新型コロナウイルス感染症は、大学教育に極めて大きな影響を与えた。2020年度は、多くの大学で前期の授業開始時期を遅らせて、講義・実技ともにオンラインやオンデマンドによる授業の導入などが余儀なくされた⁶⁾。後期

には対面授業が再開されるも、多くの大学で対面授業とオンラインやオンデマンドの併用による授業展開となった⁷⁾。実習科目とりわけ野外スポーツ実習では、キャンプを中心とした夏季野外スポーツ実習を開講している大学54件のうち、実習を実施したのは19件(約35%)であり、そのうち16件(約84%)が何らかの形でプログラム変更を余儀なくされていた²⁾。

このような社会状況の中、本学では2020年6月より対面での実技授業を段階的に実施してきた。2020年度の「野外スポーツ実習(野外活動)」についても、当初の予定通り9月に実施することを前提に準備を始め、十分な検討を重ねた結果、学内および近隣環境で

¹⁾ 日本女子体育大学 (講師)

²⁾ 日本女子体育大学 (教授)

³⁾ 日本女子体育大学 (助手)

の日帰り実習として実施した。新型コロナ禍における野外スポーツ実習（野外活動）の成果と課題⁷⁾について、授業の目的とねらいに対して一定の教育効果が得られたが、キャンプの技能習得が十分ではないこと、満足度が十分に得られない可能性があることなどを報告している。また、適切な感染対策が十分にできなかった学生もいたことから、感染対策について適切な行動ができるように指導する必要性も指摘している。

2021年度の「野外スポーツ実習（野外活動）」の実施については、実習地（静岡県）での宿泊実習を前提に準備を進めていたが、2度にわたる緊急事態宣言の発出により、2020年度と同様に学内および近隣環境での日帰り実習として実施した。野外スポーツ実習の実施については2020年度に続き2021年度においても多くの大学で中止を決定しているようであり、本学のようにコロナ禍において継続して実施した事例は極めて少ない。したがって、本学の実践事例は感染症対策を講じた実習運営として貴重なデータとなりうるとともに、今後の災害等の状況下での実習運営などにも応用できることが期待される。

そこで本研究の目的は、新型コロナ禍における野外スポーツ実習（野外活動）の成果と課題について、2020年度および2021年度の継続的な取り組みから検討することとした。

II. 方法

1. 研究デザイン

本研究は、新型コロナ禍における野外スポーツ実習（野外活動）の成果と課題を明らかにするために、実習における学びと満足度および新型コロナ感染防止対策の評価アンケートについて2021年度の結果を分析した。また、2020年度の課題として、キャンプの技能習得や満足度が十分に得られない可能性があること、感染対策について適切な行動ができるように指導する必要性が指摘されたことから、2020年度（先行

研究⁸⁾）と2021年度の年次比較についても検討することとした。

2. 2021年度における野外スポーツ実習（野外活動）の運営

1) 実習の計画と実施

①野外活動の開講および目的とねらい（シラバス）

本実習は、本学健康スポーツ学科・子ども運動学科の2年次開講の選択科目である。2021年度記載のシラバスにおいて、授業の目的とねらいは、「自然を活用したキャンプを行い、キャンプに必要な野外生活技術、環境を配慮した活動、登山等の活動、クラフト、キャンプファイヤー等を体験し学ぶことである。また、キャンプを通して自分自身や対人関係の理解、環境への配慮、リスクマネジメントの観点について考えることができるようになることをねらいとしている。」としている。

②実習の実施に向けた取り組み

2021年度の実習は当初、実習地（静岡県）での宿泊実習を前提に準備を進めていた。しかし、2度にわたる緊急事態宣言の発出（2021年4月25日～2021年6月20日、7月12日～2021年9月30日）により、2020年度と同様に学内および近隣環境での日帰り実習として計画することとなった。

計画にあたっては、シラバス内容との整合性に十分留意しながら、学内および近隣環境という限られた環境の中で、できる限り教育の質を保つことができるようにプログラムを構成した。また、昨年度の実習での課題として挙げられたキャンプの技能習得や満足度を高めること、感染対策について適切な行動ができるようにプログラムを計画した。

③実施要領

今年度の実習は、以下の要領にて実施した。

期 間：2021年8月31日(火)～9月3日(金)日帰りにて実施

場 所：学内および近隣環境（高尾山）

表 1. 事前指導の概要

回	日程	指導形態	内容
第1回	7月13日(火) 昼休み	対面	実習概要説明 実習概要、参加条件、感染対策、申し込み方法
第2回	7月20日(火) 昼休み	対面	事前学習「キャンプとは」 野外教育としてのキャンプ、キャンプ・組織キャンプの定義 実習準備 実習班分け・係分担 事務連絡 実習概要説明、感染対策への注意喚起
第3回	7月28日(水)	オンデマンド配信	事前学習「野外炊事と衛生管理」 用器具の使い方と管理(ナタ・かまど、燃焼器具) 衛生管理(食品の取り扱い・食中毒の予防) 事務連絡 プログラム内容、持ち物、感染対策への注意喚起
第4回	8月16日(月)	オンデマンド配信	事前学習「登山と安全管理」 登山の方法(地図読み、ルール・マナー) 安全管理(事故、危険な動植物、登山計画、服装や用具) 事務連絡 感染対策への注意喚起
第5回	8月30日(月) 9:00～15:00	対面	事前学習「キャンプファイヤー」 キャンプファイヤーの考え方と進行方法 実習準備 登山ミーティング、実習の目標設定(グループワーク) 事務連絡 スケジュールの確認、感染対策への注意喚起

指導者：中丸信吾（授業担当）、奥玉 南（助手）、清田綾子（助手）

授業担当者は、公益社団法人日本キャンプ協会公認キャンプディレクター1級の資格を持つ野外教育を専門とする教員である。

参加者：30名（2年生28名，3年生2名）

参加者の実態として、キャンプ体験がある学生が17名（56.7%）ない学生が13名（43.4%）であった。また、キャンプ体験のある学生のうち、他者に教えることができる技能を習得している学生は6名であった。

班編成は、1班7-8名，4班編成とした。係分担任は、班長・登山係（1名）、副班長・衛生係（1名）、用具係（1～2名）、食事係（1～2名）、ファイヤー係（1～2名）とした。

なお、実習前・実習中・実習後の参加者の体調は、実習前14日間の体調不良の報告はみられず、実習中は、体調不良：0件，発熱：0件，ケガ：1件（クラフ

トでの切り傷）であった。また、実習後1週間の体調不良の報告もみられず、大きなケガや病気もなく、新型コロナウイルス感染症の疑いのある症状もみられなかった。

④事前指導

全5回の事前指導を行った。1・2回目および5回目は対面で実施し、3・4回目は新型コロナ感染防止に配慮しオンデマンド配信とした。各回の指導内容については表1に示す通りである。指導内容は、実習に向けての実務的な準備に加えて、新型コロナ感染防止対策に関する注意喚起、日帰り実習の実施に伴う学習内容の不足に対応する講義（対面およびオンデマンド配信による学習）を行った。また、実習前日にはグループワークにて実習の目標設定を行い、学生の自主的で協力的な関わり方が促進されるように配慮をした。

また、新型コロナ禍における実習を実施することの意義について、体育・スポーツは実践から学ぶことが重要であるため感染対策を講じて安全に実習を行うこ

表 2. 実習プログラム

	8/31(火)	9/1(水)		9/2(木)		9/3(金)
	全員	<1-2班>	<3-4班>	<1-2班>	<3-4班>	全員
9:00	現地集合(時間差)	大学集合		大学集合		大学集合
		朝の集い・登山報告会		大学集合		アウトドアスポーツ
		燃焼器具講習 野外炊事	クラフト	クラフト	燃焼器具講習 野外炊事	撤収
12:00	登山(高尾山) 昼食(各自)	昼食(各自)	昼食(各自)	昼食(各自)	昼食(各自)	まとめ・閉講式
15:00		仲間づくりゲーム		野外スキル講習 (テント設営・ロープワーク)		解散
	班別ミーティング	班別ミーティング		キャンドルファイヤー準備		
18:00	解散(時間差)	解散		夕食(学食)		
				キャンドルファイヤー		
				班別ミーティング		
21:00				20:30終了		

表 3. 2020 年度と 2021 年度の実施内容

活動名	年度	内容
登山	両年	高尾山登山 前日の登山ミーティングにて登山計画を行う
燃焼器具講習 野外炊事	2020	簡易的な食事づくり バーナーを使ってお湯を沸かして、アルファ米・レトルトカレーでカレーライスを作る
	2021	空き缶炊飯 バーナーを使ってお湯を沸かしてレトルトカレーを温め、カレーライスを作る
テント設営 ロープワーク	2020	テント設営・タープ設営(一部ロープワークを使う) ロープワーク講習
	2021	テント設営 ロープワーク講習・ブルーシートを使った簡易シェルタ(キャンディ)づくり
自然体験ゲーム	2020	楽しみながら自然体験や自然観察ができるゲーム(近隣公園を利用)
	2021	実施せず(緊急事態宣言下により、近隣公園の利用停止)
仲間づくりゲーム	2020	ASE(Action Socialization Experience:社会性を育成する実際体験) いわゆる課題解決型のゲーム
	2021	ASE(Action Socialization Experience:社会性を育成する実際体験) 自然体験ゲームの非実施に伴い活動時間の配分を増加させて実施
キャンドルファイヤー	両年	レク係の進行によるキャンドルファイヤー 点火の儀、ゲーム、グループ発表、歌、分火
クラフト	2020	鉛筆ストラップ・年輪キーホルダー・ヘンププレスレット・ネームプレートのいずれかを選択
	2021	ヘンププレスレット・ネームプレートのいずれかを選択
アウトドアスポーツ	2020	フライングディスク・カップ・スラックラインからいずれか2種目を選択
	2021	ポッチャ 2020と同じ種目を予定していたが、雨天のため室内で行う種目に変更

表4. 野外活動における新型コロナ感染予防ガイドライン（2021年度版）

実習参加の条件	<input type="checkbox"/> 実習前14日以降の健康チェックシートの記入（毎日行う） <ul style="list-style-type: none"> ・検温 → 平熱を超える発熱(37.5℃以上)の確認 ・呼吸器症状(咳、息苦しさ、咽頭痛、鼻水)の有無 ・味覚障害等の異変の有無 <input type="checkbox"/> 以下のいずれかに該当する場合には実習参加を中止する <ul style="list-style-type: none"> ・実習直前または実習期間中に感染の疑いがある症状が出た場合 ・新型コロナウイルス感染症陽性とされた者との濃厚接触がある場合 ・過去14日以内に政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航又は当該在住者との濃厚接触がある場合 <input type="checkbox"/> 病気・ケガのある学生は、医師の許可がある場合に実習に参加できるものとする <input type="checkbox"/> 実習後1週間以内に体調不良になった場合は、速やかに報告する <input type="checkbox"/> 実習参加に関する行動規範の遵守(学生の誓約書および保護者の承諾書を提出)
実習中のチェックリスト	共通事項 <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 毎日、検温と体調チェックを行う(健康チェックシートの記入) <input type="checkbox"/> マスクは、室内では必ず着用、屋外では必要に応じて着用する <input type="checkbox"/> お互いの距離を確保する(できるだけ2m以上) <input type="checkbox"/> こまめな手洗い、アルコールによる手指消毒を行う <input type="checkbox"/> 物品の共用は必要最小限にとどめ、共用する場合は、手袋の着用またはアルコール消毒を行う <input type="checkbox"/> 飲食は指定した場所とタイミングのみとし、回し食べ・回し飲みはしない <input type="checkbox"/> タオルや着替えを携帯し、汗をかいいたり汚れたら早めに対処する <input type="checkbox"/> 大きな声で話さない 野外炊事・食事 <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 調理を行うときは、腕時計やアクセサリーは全て外す <input checked="" type="checkbox"/> 食材を扱うときは、必ず手袋(天然ゴム製)を着用する(今回は生鮮食品を使用しない) <input type="checkbox"/> 調理器具を使用するときは、使用前後にアルコール消毒を行う <input checked="" type="checkbox"/> まな板と包丁は、肉類と野菜類で共用しない(今回は生鮮食品を使用しない) <input checked="" type="checkbox"/> 同じトンダ等での大皿での取り分けや回し飲みはしない(今回は個人での調理) <input type="checkbox"/> 食器・カトラリーの貸し借りはしない <input type="checkbox"/> テーブルを使う場合は、対面での着席を避け、隣との座席は1席以上空ける <input type="checkbox"/> 食事の会話はできる限り少なくする 宿泊(テント泊) <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> テントを使用するときは、一人で使用する <input checked="" type="checkbox"/> バンガローを使用するときは、収容定員の50%未満とする <input checked="" type="checkbox"/> バンガローを使用するときは、就寝中もできる限りマスクを着用する。 <input checked="" type="checkbox"/> 就寝中もできるだけ換気に努める(天候にもよる) <input checked="" type="checkbox"/> 体調を維持するため、就寝時間を確保する

とに意義があること、および、「どうしようより、どうにかしよう」という考えを持って活動の制限がある中でも工夫して実施することが大切であることを学生に伝えた。

⑤本実習

本実習のプログラム内容は、表2に示した通りである。2021年度の実施内容は、2020年度に準じて検討したが、社会状況や天候、学生の実態に合わせて、表3に示すように一部の内容を変更して実施した。特に野外炊事やロープワークでは、キャンプ体験はあるものの技能が身につけていない学生の実態や昨年度の課題でもあるキャンプの技能習得を意識し、個人での空き缶炊飯および少人数での簡易シェルタづくりを行った。また、近隣公園の利用中止に伴い自然体験ゲームが実施できなかったため、仲間づくりゲームの活動時間の配分を増大させて、人との関わり方を体験的に学ぶ機会を増やす工夫をした。さらに、アウトドアスポーツについては、当日が雨天だったため、予め計画していた雨天プログラムに変更して実施した。

2) 新型コロナ感染防止対策

本学の対面での実技授業における新型コロナ感染防止ガイドラインおよび日本スポーツ協会が示したスポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン⁹⁾に基づいて作成した野外実習における新型コロナ感染防止対策ガイドラインを、現在の社会状況に合わせて修正し2021年度版のガイドラインを作成した(表4)。

作成したガイドラインを確実に遂行するために、事前指導において新型コロナ感染防止対策に関する講義を実施するとともに、実習中において注意喚起を繰り返した。また、教員からの注意喚起だけではなく、学

生自身が主体的に感染対策についての意識付けと行動ができるように、衛生係(副班長)の役割分担として、検温・体調チェック・手指消毒の促しを行った。

3. 実習の効果検証

実習の成果と課題を明らかにするために、実習における学びと満足度および実習での新型コロナ感染防止対策の評価を行い、教育効果と新型コロナ感染対策の効果を検証した。

1) 対象

2021年度の野外活動に参加した学生30名とした(有効回答数30名、回答率100%)。

2) 調査項目

実習における学びと満足度および実習での新型コロナ感染防止対策について、学生による評価アンケートを実施した。

①実習における学びと満足度

実習における学びについては、シラバスに記載している授業の目的とねらいに対応するように、自然に対する理解、キャンプの技能習得、人との関わりについて質問した。満足度については、実習の総合的な満足度を質問した。

②新型コロナ感染防止対策の評価

実習での感染防止対策の評価については、実習に向けた対策、実習中の対策、学生自身の感染対策の行動に関する自己評価を行った。

3) 調査方法

実習終了直後(閉講式後)にGoogleフォームを用いて調査を実施した。いずれの質問項目も「とてもそ

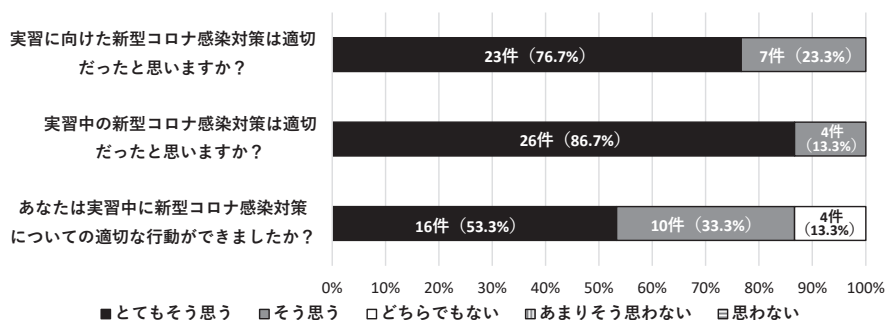


図1. 実習における学びと満足度の評価 (2021年度)

表5. 実習における学びと満足度についての理由と感想 (2021年度)

質問項目	「とてもそう思う」「そう思う」の理由	件数	
自然に対する理解について気づきや学びがありましたか？	自然環境に対する気づき	17	
	非日常の学習活動	5	
	環境問題への意識	4	
	自然の中で活動するための知識	3	
	登山の興味が高まった	2	
	爽快感・リフレッシュ	2	
キャンプに必要な技能は身につきましたか？	野外生活技術の習得	29	
	登山に関する技能の修得	1	
	用具の活用	1	
人との関わりについて気づきや学びがありましたか？	仲良くなれた	17	
	他者の理解	6	
	コミュニケーションの大切さ	6	
	協力・協調性	5	
	思いやり	2	
	信頼関係	2	
総合して、野外活動に参加して満足していますか？	活動の充実や楽しさ	15	
	人との関わり	10	
	学びがあった	9	
	非日常の体験	7	
	野外活動の技術や知識の習得	5	
	野外活動への興味	2	
	自然との関わり	1	
	宿泊キャンプが良かった	2	
	実習に関する感想やコメント	楽しく充実した実習だった	14
		期待以上の内容だった	6
コロナ禍でも実施できてよかった		5	
印象に残るプログラムがあった		2	
宿泊キャンプが良かった		3	

う思う」、「そう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「思わない」までの5段階リッカート方式で回答を求めた。また、各項目での回答の理由を自由記述にて求めた。

4) 分析方法

2021年度の評価アンケートは、得られたデータについて単純集計を行い、全回答者数に対する割合(%)を算出した。また、各質問項目の回答の理由について、自由記述の集計には、KJ法³⁾におけるグループ分けの手法を用いた。KJ法は、名刺程度のサイズのカードに転記したデータをグループ分けし、グループごとの関係を図解化した上で、それを文章化し解釈を行うという分析であるが、本研究では、分析実施者を研究代表者(筆者)とし、KJ法におけるグループ分けの手法を用いて、Excelシートに入力されたテキストデータについて意味のまとまり毎にグループ分けを行い、それぞれのグループ名を設定した。

各質問項目の年次比較には、対応のないt-testを用いた。統計的有意水準は5%とした。

5) 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、口頭にて調査の目的を説明した。回答は任意であり途中撤回を妨げないこと、研究代表者(筆者)は単位認定者だが回答しない場合でも不利益にならないこと、個人情報にはファイルにパスワード設定を施し研究代表者が厳重に管理すること、研究結果を公表する場合はIDを使用し本人特定できないようにすることを説明し、同意を得た上で回答を求めた。

Ⅲ. 結果および考察

1. 実習における学びと満足度

2021年度における実習の学びと満足度の評価を図1に、学びと満足度についての回答の理由を表5に示した。いずれの項目も全ての学生が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、限られた環境で一定の教育効果が得られたことが明らかになった。また、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答した理由として、自然に対する理解については、「自然環境に対する気づき(17件)」が最も多く挙げられ、キャンプの技能習得では、ほとんどの学生が「野外生活技術の修得(29件)」を挙げており、人との関わりについては、「仲良くなれた(17件)」、「他者の理解(6件)」、「コミュニケーションの大切さ(6件)」などを挙げていた。満足度の理由については、「活動の充実や楽しさ(15件)」、「人との関わり(10件)」、「学びがあった(9件)」、「非日常の体験(7件)」などが挙げられた。

次に各項目について2020年度(先行研究⁷⁾)と2021年度の年次比較をしたところ、いずれの項目も2021年度が高い値を示しており、特にキャンプの技能習得($p < 0.05$)および人との関わり($p < 0.001$)について2021年度が有意に高い値を示していることが明らかになった(表6)。キャンプの技能習得に関して、昨年度の結果からキャンプの技能習得が十分ではないことが明らかになったため、野外炊事での空き缶炊飯やロープワークでの簡易シェルタづくりなど、限られた環境の中でも学生個人が技能を習得できるような学習内容に変更したことが学生の技能習得の評価につながったものと考えられる。人との関わりについては、

表 6. 実習における学びと満足度の年次比較

質問項目	2020年度	2021年度	有意差
	平均±標準偏差	平均±標準偏差	
実習に参加して自然に対する理解について 気づきや学びがありましたか？	4.68 ± 0.47	4.80 ± 0.40	n.s.
キャンプに必要な技能は身につきましたか？	4.49 ± 0.59	4.77 ± 0.42	*
実習に参加して、人との関わりについて 気づきや学びがありましたか？	4.59 ± 0.49	4.93 ± 0.25	***
総合して、野外活動に参加して満足していますか？	4.73 ± 0.54	4.93 ± 0.25	n.s.

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

学内での実施に伴い自然環境が豊かではない場所でも学習できるように仲間づくりゲームを取り入れて行った。仲間づくりゲームは、課題解決型のゲームであり、ASE (Action Socialization Experience: 社会性を育成するための活動体験)¹⁾とも呼ばれ、一人では解決不可能な課題に対してグループで協力し合いながら解決していくアクティビティである。野外教育活動は、多くの活動がグループによって行われ、活動を通して他者との関係（人間関係）について学ぶことも一つの特徴である。本来は野外炊事などで実施していたグループでの学習の機会が少なくなるため、仲間づくりゲームによりグループでの学習の機会を設定した。特に、今年度は緊急事態宣言により近隣の公園が使用停止だったため自然体験ゲームを行うことができず、仲間づくりゲームの時間配分を昨年度に比べて増加させたことが影響していると考えられる。自然に対する理解、満足度については、2020年度と2021年度との間に有意な差はみられず、昨年同様に高い評価が得られた結果であった。

実習に関する感想やコメントをみると、「期待以上の内容だった (6件)」、「コロナ禍でも実施できてよかった (5件)」という回答がみられ、制限のある学習内容であっても学びを得ることができたと考えた学生がいたことがうかがえる。これは、活動の制限により実習内容に多くの期待をせずに参加していた可能性も考えられるが、本実習において感染対策を講じて安全に実習を行うことに意義があることや「どうしようより、どうにかしよう」という考えを持って実習を展開していたことが影響したのではないかと考えられる。野外教育活動は自然環境での活動が中心となるため、安全に活動するためのリスクマネジメントや天候など不確実な状況に臨機応変に対応することが求められる。本実習では自然環境での活動は少なかったものの、新型コロナ禍という状況に対しリスクマネジメントや臨機応変な対応が求められたことが学生にとって学びに繋がったのではないかと考えられる。新型コロナ禍で実施された大学の野外活動（キャンプ）⁴⁾においても、制限のある中での活動実施にも関わらず、ほとんどの学生が知識の深まりとスキルの習得を自覚していたと報告している。

このように、2020年度および2021年度の継続的な取り組みから、学内および近隣環境での実習は、社会状況に合わせて運営方法を工夫することで一定の教育効果が得られることが明らかとなった。また、新型コ

ロナ禍における野外スポーツ実習の指導上の留意点として、本実習のように自然環境での活動が少ない場合には、限られた環境下でもキャンプの技能習得、他者との関係（人間関係）の構築、リスクマネジメントや臨機応変な対応といった野外教育活動における学びの要素を踏まえることで、質の高い実習に繋がる可能性があることがうかがえた。

一方、満足度の理由や実習に関する感想やコメントにおいて、「宿泊キャンプがしたかった (計5件)」という回答もみられ、実習地での宿泊を伴う実習への期待度がうかがえた。野外教育活動は、「直接体験」を基本とする「learning by doing: 実際の活動を通じた学び」である体験学習によって行われる取り組み⁵⁾であるため、フィールドでの活動体験からしか得られない学びが存在する。したがって、本質的に野外活動の学習目標を達成するためには、実習地での宿泊を伴う実習（キャンプ）を行う必要があることは言うまでもない。

2. 新型コロナ感染防止対策

2021年度における実習での感染防止対策について、実習に向けた対策、実習中の対策、学生自身の感染対策の行動に関する評価の結果を図2および表7に示した。実習に向けた対策、実習中の対策では、全ての学生において「とてもそう思う」または「そう思う」との回答が得られた。「とてもそう思う」、「そう思う」の理由については、実習に向けた対策では「感染対策を講じた実施計画 (16件)」、「注意喚起 (6件)」などが挙げられ、実習中の対策では「体調チェック・検温・消毒の徹底 (25件)」、「食事での感染対策 (10件)」などが挙げられ、実習に対して適切な感染防止対策を講じていることができていたことが明らかになった。

感染対策に関する学生自身の自己評価においては、「とてもそう思う (16件53.3%)」「そう思う (10件33.3%)」との回答が得られ、「対策 (手洗い・うがい・消毒) ができた (22件)」や「放課後の感染対策ができた (6件)」という学生が多かった。一方で、適切な行動ができたという学生の中でも、「対策が上手くできなかった (4件)」と回答している学生が存在した。さらに、「どちらでもない (4件, 13.3%)」と回答した学生がおり、回答の理由では「対策が上手くできなかった (4件)」と回答していた。このように、学生自身の自己評価では感染対策についての適切な行動が十分にできなかった者もみられることが明らかとなっ

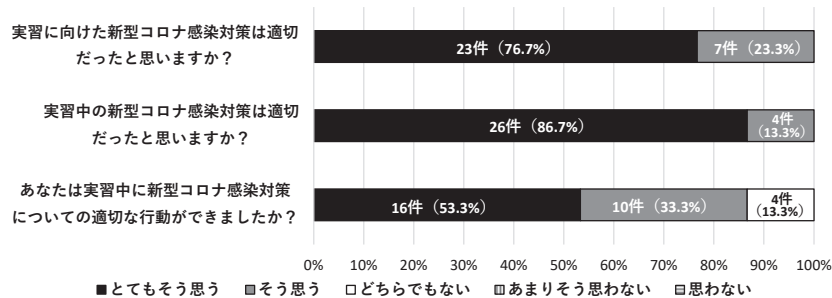


図2. 実習における新型コロナ感染防止対策の評価 (2021年度)

表7. 新型コロナ感染防止対策についての理由 (2021年度)

質問項目	「とてもそう思う」「そう思う」の理由	件数	「どちらでもない」の理由	件数
実習に向けた新型コロナ感染対策は適切だったと思いますか？	感染対策を講じた実施計画	16		
	注意喚起	6		
	感染対策の明確な提示	4		
	事前の健康チェック	2		
	感染対策を講じた事前指導の運営	2		
	保護者への配慮	1		
	その他	1		
実習中の新型コロナ感染対策は適切だったと思いますか？	体調チェック・検温・消毒の徹底	25		
	食事での感染対策	10		
	注意喚起	1		
	安心できる対策だと感じた	1		
あなたは実習中に新型コロナ感染対策についての適切な行動ができましたか？	対策(手洗い・うがい・消毒)ができた	22		
	放課後の感染対策ができた	6		
	ソーシャルディスタンスへの配慮ができた	3		
	食事の感染対策ができた	2		
	対策が上手くできなかった	4	対策が上手くできなかった	4

表8. 実習における新型コロナ感染防止対策の年次比較

質問項目	2020年度	2021年度	有意差
	平均±標準偏差	平均±標準偏差	
実習に向けた新型コロナ感染対策は適切だったと思いますか？	4.56 ± 0.50	4.77 ± 0.42	n.s.
実習中の新型コロナ感染対策は適切だったと思いますか？	4.49 ± 0.55	4.87 ± 0.34	**
あなたは実習中に新型コロナ感染対策についての適切な行動ができましたか？	4.28 ± 0.67	4.40 ± 0.71	n.s.

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

た。この結果は2020年度の報告⁸⁾と同様の傾向であった。また、新型コロナ禍で実施された大学の海洋スポーツキャンプ実習における感染対策の評価¹⁰⁾によると、実習に向けた対策 (4.67 ± 0.68) や実習中の対策 (4.59 ± 0.77) の評価に対して、学生自身の自己評価 (先行研究では「対策についてあなたはどの程度自信がありますか？」と質問している。) は低い値 (4.22 ± 0.63) であり、本研究と同様の傾向を示していた。

新型コロナ感染防止対策の評価の年次比較 (表8) では、実習中の対策について2021年度が有意に高い値 (p<0.01) を示した。昨年度の結果から、実習中の感染対策の不備が明らかになったことや、緊急事態宣言下での実施であったため、実習に向けた対策および実習中の対策を徹底して行った。具体的には、班単位で衛生係 (副班長) を中心に、午前・午後および夜 (活動がある日) の集合時に検温 (非接触型体温計) ・体調確認および手指消毒を実施する仕組みを構築した。また、学食での食事の際には、向かい合って着席しないように各テーブルに全員が同一方向で、さらに左右に1席以上の間隔を空けて黙食とした。このような感染対策の徹底が、実習中の対策の高評価につながったものと考えられる。評価の理由において多くの学生が体調チェック・検温・消毒の徹底と食事での感染対策

を挙げていたことからわかる。また、昨年度の結果から、学生自身が適切な感染対策行動ができるように指導する必要性が考えられたため、教員からの注意喚起だけではなく、学生自身が主体的に感染対策についての意識付けと行動ができるように、衛生係 (副班長) の役割分担として、検温・体調チェック・手指消毒の促しを行ったが、期待する高い効果はみられなかった。学生自身が適切な感染対策行動ができるように指導する方策について、今後も検討する必要があるといえる。

IV. まとめ

本研究では、新型コロナ禍における野外スポーツ実習 (野外活動) の成果と課題について、2020年度および2021年度の継続的な取り組みから、学内および近隣環境での実習は、社会状況に合わせて運営方法を工夫することで一定の教育効果が得られることが明らかとなった。また、新型コロナ感染防止対策では、実習に向けた対策および実習中の対策が適切に行われたことが明らかとなった。一方、学生の自己評価において、適切な感染対策が十分にできなかった学生もいたことから、感染対策について適切な行動ができるように指導する必要性が考えられた。

本質的に野外活動の学習目標を達成するためには、実習地での宿泊を伴う実習（キャンプ）を行う必要があることは言うまでもない。しかし、新型コロナ感染症だけでなく台風などの影響により実習地での宿泊を伴う実習が実施できないケースもあるため、学内および近隣環境での日帰り実習は代替プログラムとして一定の教育の質を担保する必要がある。本学における2年間の継続的な取り組みは、学内および近隣環境での日帰り実習における質の高い実習運営の構築に寄与したと考えられる。

今後は、本研究で得られた成果と課題を元に、実習地での宿泊を伴う実習において学びが多く満足度の高い学習内容を検討するとともに、感染症防止対策（新型コロナウイルス感染症を含む）を講じた運営方法を構築していきたい。

付記

本研究は、2021年度開講科目「野外スポーツ実習（野外活動）」の授業において収集・作成したデータを利用したものである。

引用文献

- 1) 福富 優, 平野吉直 (2014) ASE を取り入れたキャンプ活動がサッカーチームの雰囲気には及ぼす影響, 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要, 3: 57-68.
- 2) 福富 優, 中丸信吾, 坂谷 充, 向後佑香, 青木康太郎, 瀧 直也, 徳田真彦, 伊原久美子, 橋本和俊 (2021) コロナ禍における大学夏季野外実習の実態調査－2020年度の実施状況－, 日本野外教育学会第24回大会プログラム・研究発表抄録集, 46-47.
- 3) 川喜多二郎 (1970) 続・発想法－KJ法の展開と応用, p.2-316, 中央公論新社, 東京
- 4) 北村優弥, 横山誠 (2021) コロナ禍における大学教育での「野外活動」の取り組みに関する一考察, キャンプ研究, 24, 55-62.
- 5) 小森伸一 (2011) 野外教育の考え方：野外教育の理論と実践 (自然体験活動研究会編), p.1-11, 杏林書院, 東京.
- 6) 公益社団法人全国大学体育連合 (2020) 新型コロナ感染症拡大に伴う授業実施に関する緊急アンケート, <https://daitairen.or.jp/?p=13097> (2020年11月20日参照)
- 7) 文部科学省 (2020) 大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査, https://www.mext.go.jp/content/20210212-mxt_kouhou02-000006590_1.pdf (2021年9月27日参照)
- 8) 中丸信吾, 森田陽子, 奥玉 南, 大西歩美 (2021) 新型コロナ禍における野外スポーツ実習（野外活動）の実施成果と課題, 日本女子体育大学大学総合研究, 4, 51-61.

- 9) 日本スポーツ協会 (2020) スポーツイベントの再開に向けた感染拡大予防ガイドライン, <https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/jspo/guideline2.pdf> (2020年6月10日参照)
- 10) 徳田真彦, 伊原久美子, 富山浩三 (2021) コロナ禍における大学野外活動実習の実践報告－大阪体育大学の取り組み－, キャンプ研究, 24, 47-54.